

2021年

7月第1・2・3週の礼拝説教要約

・ 7月4日：ルカ福音書6:27-36.

「 敵をも愛する 」

・ 7月11日：ルカ福音書7:11-17.

「 若者よ、甦れ 」

・ 7月18日：ルカ福音書7:18-23.

「 躓かない人の幸い 」

・ 7月25日：（宮原牧師、夏期休暇のため要約はありません。）

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

「敵を愛する」という言葉がメシヤ=キリストの口から発せられる時にその言葉の重みは、聖書の民にとっては計り知れないものとなります。

アフガニスタンで新政権を樹立した勢力が、先ず最初に旧勢力との融和を宣言したのは注目に値します。ただ、それが困難を極める方針であるのは誰の目にもあきらかです。敵対関係にある当事者同志が、平和の維持のために奔走しつつ衝突を避けることは、ほぼ不可能だからです。

古代、聖書の民がカナンの地に侵攻した後に、イスラエル王国の建設のためにどれだけの血が流されたかを想像してみればよくわかります。占領者となった古代イスラエルが、いち早く、「寄留の他民族の保護(!?)のための政策」を確認したのは、不可能を可能にするための苦肉の策でした。ユダヤ人は歴史的に統一王国の時代も含めて、数多くの敵対者と相対する運命にありました。自身のための独立国家は、その継続が困難となり常に隣国からの侵略を受け占領され国境線を失い、多民族との共存は避けられないものとなります。

ユダヤ人は、そのアイデンティティーの保持の為の民族主義の強化を打ち出します。その根拠をユダヤ教の掟(=律法)に置き、解釈における柔軟性を排除し、「律法主義」の深化と貫徹にこだわりました。祭司や律法学者やパリサイ人らが中心となり強力に推し進められた民族主義は、やがて、あろうことか神キリストに対する敵愾心として燃え上がることとなります。しかし、こうした人間の謬った信仰的態度は、本来なら、人類が素直に享受すべき神の恩恵を、矮小化してしまい その結果ユダヤ人の独自性ばかりが形成されて他民族や異教徒との間に、深刻な亀裂が生じる事態となりました。

けれども、誰であれ民族にかかわらず、同じ神の被造物として生きる者です。神はその被造物が互いに憎しみあうことも、殺しあうことも望まれませんし、憎しみを煽る思想がはびこることも望まれません。

「あなたがたの父(神)が慈しみ深いように、あなたがたも慈しみ深い者となりなさい」、これが造り主である父なる神様の真心なのです。

ナインという場所は、イエスの故郷のナザレから南南東に約10Kmほど下った山間部にありこの地は唯一、ルカ福音書のこの箇所に出てきます。このエピソードも、ルカだけが知っています。面白いことに棺(κῆφος)という単語の使用も新約聖書ではここだけで、旧約聖書には同義語が数ヶ所、それも歴史にのこる有力者の葬儀の場面にだけ用いられています。因に、十字架から降ろされたイエス・キリストの移動でさえ棺(κῆφος)が用いられたという形跡がないのです。

おそらくこの若者は、現地の有力者の子息だったと考えられます。大勢の人々が彼の亡骸の後に従っている光景は、旧約聖書の有力者の葬儀の場面を彷彿とさせるものがあります。ただ、遺跡の発掘とは違い、この仮説を裏付ける証拠は、他にはありません。

このエピソードに関しては、ともすると遺されて嘆き悲しむ寡婦の母親の方だけがクローズアップされます。イエスの行動は、まさにその悲嘆の終息のためのものとしてのみ解釈されてしまいます。

ところが、この若者の復活は母親が喜ぶだけでは終わりません。さらなるエピソードが付け加わります。何でしょう？ 実は、この若者は甦っただけではなく、立って何かを語り始めるのです。寝言でしょうか？ もしそうだとすると、彼が語ったという事実はわざわざ福音書には記載されなかったでしょう。

彼は語った、人に対して。この場に居合わせた母親と、その背後に従っている大勢の参列者に対して、彼は明らかに何かを語ったのでした。その死が克服されることにより。救われる人々、安堵する大勢の人々に対して、何かを語っているのです。

さらに、その時の反響が大きかった。人々は口々に、「神はその民を顧みてくださった。」と叫び、また、その大きな力を発揮したイエス・キリストのことを。彼らの只中に出現した「偉大な預言者」として称賛しているのです。この一人の若者の復活劇が、ただならぬ出来事であり、神が歴史に介入された一例であったことを、読者は悟らなければならないのです。

「来たるべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方をまたなければなりませんか。」このヨハネからの切問は、文字通り切実な問いでした。同じルカ福音書の降誕節の記事に出てくるシメオン(預言者?)はイエスがキリストであることを、その幼子の段階で聖霊によって知らされましたが、洗礼者ヨハネには同様の告知はなかったようです。彼がイエスに洗礼を授けた時にも、イエスの存在理由をより深く知るには至りませんでした。ただ、ヨハネの弟子たちは、なぜかイエスの言動を逐一ヨハネに報告するために——当時、ヨハネはヘロデによって投獄されていた——獄中のヨハネとイエスとの間を、交代で行き来していたようです。彼らが目撃したイエスの行動とは、イザヤ書に記されていた救いの時がそのまま現実のものとなっている時なのです。

…神が来られ、あなたがたを救う。その時見えない人の目は開けられ、聞こえない人の耳は開かれる。その時、歩けない人は鹿のように跳びはね、口の利けない人の舌は歓声をあげる。

(聖書協会共同訳 イザ書 35:4e-6a)

「神が来られ、あなたがたを救う」その時が、イエス・キリストが来られたことによって実現している。この事実を、ヨハネの使いである弟子達は目撃証人となって獄中の師に報告しなければなりません。

ただ、イエスの業は、その殆どが、神の領域において実現するはずの事例です。しかし、それがもし人間の領域で実現した場合に、この世の民の反応はどうなるのでしょうか。

神キリストの真意はいかなる場面においても、そのしるしを人が信じるのか、信じないのかを迫るものです。これを受け入れるのか？それとも受け入れないのか？

洗礼者ヨハネにも、また、その弟子達に対しても、全く同じ問いが投げかけられています。いや、人々の只中にある神とその国のしるしを見てしまった者なら誰にでも。